

御伝鈔(その5)

親鸞聖人のひ孫である覚如上人が、親鸞没後33年に親鸞聖人の御遺徳を讃えた『報恩講私記』を著わされました。続いてその翌年、親鸞聖人の伝記絵『親鸞伝絵』を著わされ、詞書(ことばがき)の部分だけを『御伝鈔』(上巻・八段、下巻・七段)といいます。

第五段「選択付属(せんじゃくふぞく)」

元久二年(1205)法然上人から『選択本願念仏集』の書写を許可されました。同じ年の4月14日、書写しものに『選択本願念仏集』という題名と、「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」という副題と、釈綽空という名前を法然上人自らが書いてくださいました。

また同じ日(4月14日)に、法然上人の御真影(肖像画)をお借りすることができましたので、ありがたく描かせていただきました。その年の閏(うるう)7月29日、描いた肖像画に法然上人が直筆で、「南無阿弥陀仏」の名号と「若我成仏十方衆生 称我名号下至十声 若不生者不取正觉 彼仏今現在成仏 当知本誓重願不虛 衆生 称念必得往生」(もしわれ成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称せん。下十声に至るまで、もし生まれずば正覚を取らじ。彼の仏いま現にましまして成仏したまへり。まさに知るべし、本誓重願虚しからず、衆生称念すれば、必ず往生を得。)という善導大師の『往生礼讃』に記されていたお言葉を、お書きになられました。しかも、夢のお告げによって綽空という私の名前を改めて、直筆で別の名前を書いてくださいました。その時、法然上人は73歳でした。『選択本願念仏集』は、そのころ出家しておられた閑白・九条兼実公(くじょうかねざね)の命令によって著されたものです。

真宗の要点や、念仏の教えの奥深いところが、この著書の中には、よく述べられています。ですから、これを見るものは、念仏の教えを理解しやすく、これ以上勝れた書物は他にありません。

しかし、法然上人のお弟子は数多かったのですが、実際に拝見し、書写を許されたものは本当にわずかしきません。それなのに、私親鸞は、拝見並びに書写を許され、さらに御真影(肖像画)まで描かせていただきました。これはひとえに念仏を称えさせていただく身となった徳によるもの、また浄土へ必ず往生できるというしるしであります。ここに涙をおさえながら、これまでの経緯を記しておきます。



平成27年度 初参式(平成27年5月31日開催)

住職レター

仏教用語は難しいですね。

六月二十七日(土曜日)、善教寺本堂にて、安居会法要(夏の法要)を勤めます。法事で時々、「あんきよかい」って、どういった意味があるのですか?と聞かれます。実は読み違いで、「あんごえ」が正しいです。

安居とは、梵語の雨期を日本語に訳したもの。雨期には草木が生え繁り、昆虫、蛇などの数多くの小動物が活動する。これらの小動物に対する無用な殺生を防ぐため、外での修行をやめて個々に活動していた僧侶たちが、一定期間、一カ所に集まって集団で仏法聴聞することを表します。

雨季だから、外での托鉢修業が辛かったのかな?と、私のような生臭坊主は思ってしまうます。

安居の修行中、手を清めるための、たらいに入

ったお水に対しても、自前の手拭いでそのお水をすくい取るのだそうです。不衛生な水を綺麗にするため?ではなくて、その水の微生物を殺生しないためです。

安居会法要、お誘いあわせてお参りください

